

次号予告

とびら	横浜市大	生田 宗博
特集=脳卒中		
老年脳卒中片麻痺患者の理学療法.....	都養育院	松村 秩
脳卒中片麻痺患者のきき手交換訓練.....	都心障センター	鬼怒川 博也
失語症を持つ患者に対する接し方.....	都老人研	綿森 淑子
脳卒中に使われる薬の知識.....	韭山温泉病院	長谷川 恒雄
印象記 第10回日本理学療法士学会印象記.....	リハ学院	金子 誠喜・他
第9回日本作業療法士学会印象記.....	国立身障センター	澤 治子・他
講座 運動学シリーズII		
「肩・肘・手関節の Kinesiology (3)」...	府中リハ学院	金子 翼
精神科 OT の展開 精神分裂病のリハビリテーション (3)		
.....	世田谷リハセンター	宮崎 和子
コメント.....	府中リハ学院	鈴木 明子
雑誌レビュー Physical Therapy (1974 年度) まとめ.....	リハ学院	田村 美枝子
Physiotherapy (1974 年度) まとめ.....	九州リハ大	橋元 隆
Q and A	A: 近畿リハ学院	ジャネット・平田
	Q: 日下部病院	富岡 詔子

編集後記

今月は「ホームプログラム」を特集とした。脳卒中、リウマチ、脳性まひの3つの疾患について、それぞれ経験の深い PT, OT の方に執筆いただいた。「随想」の執筆者も含めて、異口同音に述べられていることは、「ホームプログラムを継続実施させることはむずかしい」ということと、「定期的なフォローアップが必要である」ということであろう。病院や施設内での訓練とは異なり、家庭というものは千差万別である。家族構成、一日のスケジュール、間取り、家族員の患者への態度、本人の家族の中での位置づけと役割、その他あらゆる情報を集め、その上に立って、実行可能な、無理のない、具体的な指導をするのが PT, OT の腕である。このことから、実際に家庭を訪問し、セラピスト自身の目で確かめを行いつつ、患者や家族と相談してプログラムを立てるのが最も確実な方法と云えよう。但し、こうした経験を積み重ねて

いくと、訪問しなくても、与えられた情報だけで、その家庭が頭の中に組み立てられてくる。「想像力」が培われるわけで、こうなればしめたものである。

雑誌レビューとして、今月号は 1974 年版、米英両国の作業療法誌をとりあげた。米国の雑誌は概論、抽象論が多く、英国のはプラクティカルな内容が多いと感じてきたが、この年もまたそのようである。

その他、PT, OT 協会が本年、創立 10 周年を迎えたことを記念して、両協会長が一文をのせている。10 年一昔——これから、PT, OT に一層の発展があらんことを！

最後に、PT 協会長松村秩氏が、元 PT 協会長であられた野本卓氏に追悼のことばを送っている。PT の発展に心から尽力なされた氏の御冥福をお祈り申し上げる。

(寺山久美子)

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院長
五 味 重 春
府中リハビリ学院長
砂 原 茂 一
国立療養所東京病院長
津 山 直 一
東京大学教授・整形外科
水 野 祥 太郎
川崎医科大学学長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部
荻 島 秀 男
都養育院リハビリ部
佐 藤 馨
神奈川リハセンター
鈴 木 明 子
府中リハビリ学院
谷 岡 淳
自治医科大学
田 村 美枝子
清瀬リハビリ学院
寺 山 久美子
都心障センター
松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

明 石 謙
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
大 橋 博
鎌 倉 矩 子
紀 伊 克 昌
小 林 夏 子
駒 沢 治 夫
佐 藤 剛
田 原 澄 彦
富 岡 詔 子
奈 良 勲
藤 沢 しげ子
藤 本 欽 也
前 田 守
松 本 妙 子
矢 谷 令 子
山 下 隆 昭
横 山 巖
和 才 嘉 昭
(担当 細田・松橋)